森林レンジャーがゆく（47）

養沢の大野道

「昔は提灯持ってよぅ、養沢の衆はこの道を歩いて御岳にお酒を飲みに行ったと聞いたぞ。」昨年12月から養沢自治会主導で昔道のひとつ「大野道」の復活整備を行いましたが、その時に教えていただいたことの一部です。昭和の初め頃、養沢の男たちの居酒屋は山を登った頂上にあったようです。

大野道の整備は自治会で11回、レンジャーはそのうちの７回協働で実施し、ようやく今年の５月に道標（どうひょう）を取り付け完成に至りました。荒れた道を整備し土留めを作り、必要な箇所には倒木や切り捨てられた材を利用して階段や橋を設置しました。

実はこの大野道が存在したことにはとても重要な意味があります。昔は御岳講の本道として利用されており、市内外から多くの人が養沢を訪れました。御岳講とは山の神「おいぬ様」を祀り、１年の無事や豊作をお願いするものです。信仰だけに留まらず、多くの人が集う情報交換の場にもなっていたようです。養沢は全国の情報が行き交う先進的な地域だったのかもしれません。私が養沢の方から聞いた話によると、江戸時代中期から御岳講が広まり、昭和30年頃までは養沢を訪れる人がいましたが、

尾根に設置したベンチでいっぷく

その後大野道を歩く人はいなくなったそうです。

御岳講は、人の手では思いどおりにならない自然と折り合いをつけて生きてきた人々の大切な願いが込められたものだったのでしょう。それは、祀られているおいぬ様が絶滅したとされるニホンオオカミのことで、人を襲ったという話もありながら盗難・火難除け、農作物を荒らすイノシシやシカを食べ、畑を守ってくれる聖獣として古来からあがめられていたことからも見て取れます。オオカミの存在を受け入れ尊敬して生きていかなければ、人が生き残れなかったのかもしれません。

時代は変わり人の生活も変わりました。その結果、自然も変わりました。それでも変わらないのは、人は自然に生かされているということでしょう。あの頃に思いをはせながら、養沢の皆さんの知恵と経験が詰まった道を、もう一度歩いてみようと思います。（加瀬澤）